令和５年度　岐阜県教科用図書　第２回　可茂地区採択協議会　議事要旨

１　日時　　令和５年７月４日（火）９：００～１６：００

２　会場　　みのかも文化の森　緑のホール

３　議事

（１）事務局からの説明

・公正確保について

・教科用図書の調査研究の概要

（２）可茂地区採択協議会会長　挨拶

・協議会の開会の宣告

・可茂地区において、教科用図書を選定することについて

（３）会の成立

・委員の半数以上の出席があり、会が成立することを確認

（４）議案の審議

・規約第３条に基づき、可茂地区採択協議会副会長を議長として議事を進行

■「国語」の調査研究報告

・調査項目１「学習指導要領」について

３者とも国語科で育成を目指す資質・能力に関する内容がバランスよく配分されており、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」がわかりやすいものになっていた。

【東京書籍】

「書くこと」の領域と、情報の扱い方に関する事項と関係性を持たせながら、単元が位置付けられていた。また、情報の扱い方に関する事項はどの学年にも振り分けられており、６年間を通して、バランスよく学ぶことができる。

【教育出版】

「書くこと」の領域に関して、それぞれ独立した単元が多い。情報の扱い方に関する事項は、説明的文章を書く単元の中に組み込まれていた。

【光村図書】

「書くこと」の領域に関して、１年間を通した計画だけでなく、６年間で発展していく単元構想となっていた。特に、「読むこと」との複合単元が仕組まれており、課題解決型の授業で子供たちの単元への意識が高まるような工夫がみられる。また、情報の扱い方に関する事項は、「読むこと」の説明的文章の単元と共に扱うことが多いことで、読み込んだ文章の中で理解が進むような工夫があった。

・調査項目２「岐阜県教育振興基本計画」について

３者とも、ふるさと教育の推進に向けて、郷土、地域を題材とした教材や単元が位置付いている。ま

た、ICT を活用したデジタル学習のコンテンツの内容を取り入れていた。
【東京書籍】
　コンテンツの数が非常に多い。モデル動画で児童が目指す姿が明確になっており、イメージが湧く。資料の中には、漢字などのワークシートが多数掲載されており、印刷して使うことができるようになっている。また、ＱＲコードが多くのページに配置されており、必要な動画等がすぐに見ることができる。
【教育出版】
　コンテンツの内容は、作者の紹介などの補足資料が多い。また、NHK や市役所の HP などの外部とのリンクが多くある。
【光村図書】
　コンテンツの内容は、動画や音声、写真など、目や耳で触れる教材が多く、単元の出口で目指す姿が示されていて明確にイメージできる。また、既習の学習を一覧で振り返ることができるような工夫がされており、学習したことを確認しながら進めることができる。

・調査項目３の「印刷製本等」について
　１～４年生は３者ともに上・下の分冊となっている。それぞれの重さは３００ｇ程度である。５、６年は【東京書籍】と【光村図書】が１冊５００ｇ程度、【教育出版】は分冊で３００ｇ程度である。３者とも発達の段階に応じて、文節ごとの分かち書きなど、低学年児童への配慮がある。

　絞り込んだ２者について説明。

・６年生の「書くこと」における教材について
【東京書籍】
　「発信しよう、私たちのＳＤＧｓ」ではＳＤＧｓを題材にしており、総合的な学習の時間などと関わらせて学ぶことができる。しかし、単位時間の活動内容が多岐に渡るため、可茂の子どもたちにとって付けたい資質・能力を焦点化しにくい。
【光村図書】
　「おすすめパンフレットをつくろう」では、映画や音楽などの子どもが興味をもっていることを題材に学習を進めることができる。単位時間の活動が焦点化されており、目指す姿のモデルも示されていることで学習過程が非常に分かりやすい。「書くこと」に対して苦手意識をもつ可茂の子どもたちにとって、学習の見通しが非常にもちやすいと考えた。

・ふるさと教育に関わる点について
【東京書籍】
　郷土や伝統に関する単元は、各学年に配置されている。６年生では、ＳＤＧｓについて協働的に調べ、発信する活動を設定している。
【光村図書】
　郷土・伝統に関する単元の他に、ＳＤＧｓに関するテーマを多く扱っている。学年が上がるにしたがって、地域から世界へと児童の視野を広げる工夫もされている。外国籍児童が多い可茂地区に適していると考えた。

・分かち書きについて
　３者ともに、発達の段階に応じて文節ごとの分かち書きなど、低学年児童への配慮があったが、光村図書は、教科書の上下や学年の変わり目ではなく、文章の組み立ての学習を行った後に、分かち書きをなくしており、段階的に文章に慣れさせるという細かい配慮がなされていた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【光村図書】がより適していると考えた。

■「書写」の調査研究報告
・調査項目１「学習指導要領」について
　３者とも「文字を書く技能」や「文字や言葉の知識」に関する教材がバランスよく配分されており、分かりやすいものになっている。学びの基本姿勢と各学年相互間の発展性という点を調査した。
【東京書籍】
　１年生硬筆で、書き始めと書き終わりを意識し、「とん」で始まり「ぴたっ」で止めるなど、書きはじめを意識する手立てが最初にある。さらに１、２年生と３～６年生共通の「姿勢、持ち方」ページが掲載され、学習を始める準備が位置付けられている。
【教育出版】
　１年生硬筆において、折り返し、曲がり、折れ、結びを同時に学習する構成になっている。やや混乱してしまうことが心配される。
【光村図書】
　１年生で、「とめ」「はらい」「はね」など一つ一つの特徴が１ページに一つ掲載され確かめやすい。書き始めの位置を意識することについては、教科書の最後にあるため、つながりをもたせて使うには不便であると考えた。

・調査項目２「岐阜県教育振興基本計画」について
　３者とも ICT を活用したデジタル学習のコンテンツの内容を取り入れている。
【東京書籍】
　コード数が、各学年均等に用意されている。QR コードには、「見つけよう」「確かめよう」の２種類があり、硬筆で課題を見つけたり、毛筆の運筆を確認したりと、授業の流れに即した内容となっていて、活用しやすい。
【教育出版】
　「まなびリンク」と称して、授業で役立つ動画や資料を見ることができる。低学年用と中・高学年用の「学習の進め方」動画があり、試し書きから他の文字への応用を図るまでの学習過程を確認することができる。
【光村図書】
　ＱＲコードによって、学習の参考になる動画・写真・補充教材・参考資料・アニメーションを見ることができる。さらにタブレットを使う際の姿勢写真や、使用後に行う「整理体操」も掲載されている。

・多様な学びを支援する教育の充実に関わって、「適切に運筆する能力の向上」につながる補助的な内容として、３者ともに水書用紙の使用を推奨している。１・２年生で、水書で運筆を体感することは「ぴたっ」と止める動きと「はらい」のすうっと力を抜く動きの違いがより分かりやすくなると考えた。

・調査項目３「印刷・製本等」について
　教科書サイズはB5サイズが基準で、一番ページ数の多い３年生で比較すると、57ページから65ページの範囲である。重さについても123gから134gの範囲で、各者の差はなかった。また、ユニバーサルデザインフォントを使用するなど、どの教科書も配慮がされていた。

　絞り込んだ２者について説明。

・可茂地区の児童の実態から、特別な教育的ニーズのある子どもにもわかりやすいかという視点について
【東京書籍】
　教科書体以外は、ユニバーサルデザインフォントが使用されている。カラーユニバーサルデザインの観点から、配色やデザインについて、全ページにわたって専門家による検証がなされており、とても見やすい。また、「とめ・はね・はらい」の違いを種類の違うキャラクターで示している。
【光村図書】
　単元名や教材名には、ユニバーサルデザインフォントを使用している。また、すべての児童が明確に識別できる色の組み合わせに配慮している。「たいせつ」コーナーにおいて、薄い緑の背景に緑の文字で書かれている部分があり、読みにくいと感じた。

・知識・技能の確実な習得という観点について
【東京書籍】
　低学年は書きやすい持ち方をしているか比べて確認できるように、等身大の目線からの写真が掲載され、土台となる技能の定着に力を入れている。このことは外国籍児童の学びにも適している。
【光村図書】
　１、３年生は硬筆、毛筆の学習を始める学年であることから、スタートブックを掲載し、基本を大切にしているが、「えんぴつのもちかた」において、横から見た写真が大きく掲載されていることで、誤学習する心配がある。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【東京書籍】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・可茂地区の児童の実態を具体的に教えてほしい。
⇒書くことへの弱さがある。さらにこの３年間は対話的な活動が制限されてきたため、言語活動に関わってどのような工夫がされているかについて調査をした。可茂地区は外国籍児童が多いことから、特別な配慮が必要な児童が多い。

・図書館の活用に関わる教材の紹介、または読書本の紹介の冊数はどうかという点で比較検討していれば説明してほしい。
⇒【東京書籍】では、単元「明日への一歩を言葉とともに」で発展的な読書活動や本の紹介が扱われている。【教育出版】では、「読書の広場」というコーナーを設けて、広がる読書の世界という形で関連する読書教材や本を紹介している。【光村図書】では「本の世界を広げよう」で、複数の関連する本を紹介するコーナーが位置づけられている。

・可茂地区の実態について、書くことが苦手ということをもう少し詳しく教えてほしい。たくさん書けないのか、主語と述語の関係がおかしいのか、根拠が明らかになっていないのか、それらを踏まえた上で【光村図書】がより適していると判断した説明をお願いしたい。
⇒【東京書籍】では、単位時間の活動が多岐にわたっている。また、モデル文が少ない。【光村図書】では、細かな活動の内容が１つずつ丁寧に説明してある。可茂の子どもは全体を捉えて書くことよりも、部分部分を捉えながらきちんと書かせることが必要な子が多い。モデル文の提示が多く、活動が焦点化されている【光村図書】が活用しやすいと考えた。

・読むこと、読み取る力についてはすべての教科に関わっている。このことで比較したことはあるか。
⇒【光村図書】の方が、見通しを持ちやすい構成になっている。【東京書籍】では、「取り組む１、２、３」となっているのに対して、【光村図書】では、「捉える、深める、まとめよう、広げよう」ということで、見通しが持ちやすい内容で構成されている。

・読むこと、書くこと、話すことの教材数のバランスについて各者で大きな違いはあったか。
⇒３者について、大きな差はない。ただ、【光村図書】では、説明的な文書を読むことから、書くことへ移行していくということで、同時に扱いながら発展性を持たせているという点が、他の２者とは異なっている。

〇小学校「国語」教科用図書採択原案について、可決
〇小学校「書写」教科用図書採択原案について、可決

■「社会」の調査研究報告
・調査項目３について
　３者ともに、ユニバーサルデザインフォントを使用し、本文中の重要な語句は太字で示している。教科書の重さと児童の負担についは、軽量な紙を使用するなど、３者ともに工夫されていた。

　絞り込んだ２者について説明。

・着眼点２－（１）について
　２者とも、単元「低い土地のくらし」において海津市を取り上げ、ともに歴史資料館の服部さんの話を文書資料として掲載している。デジタルコンテンツに関わって比較した。
【日本文教出版】の QR コードからは、NHK for School につながる。
【東京書籍】の QR コードからも NHK for School につながるが、加えて、別の QR コードから動画でさらに詳しく服部さんの話を聴くことができる。

・着眼点１－（１）について、６年生の「戦争」の単元、「原爆投下」の記述について比較
【日本文教出版】は、「多くの人が一瞬で命を落とした」と書かれている。一方【東京書籍】は、「一瞬で何万人もの命が奪われる」と書かれており、状況を想像しやすい表現になっている。
　また、ソ連軍の動きについて、【日本文教出版】は「侵攻」、【東京書籍】は「せめこみ」と、やさしい言葉で書かれている。さらに、この学習では「日本がアジア諸国に与えた影響」を扱うが、第二次世界大戦で亡くなった人々の資料では、【日本文教出版】は、ヨーロッパ諸国まで掲載されているのに対し、【東京書籍】は、アジアに絞られおり、資料が精選されている。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【東京書籍】がより適していると考えた。

■「地図」の調査研究報告

・調査項目１－（１）について、巻頭の「地図の決まりや使い方」について比較

【東京書籍】

　イラストやデジタルコンテンツを使い、８ページに渡って紹介し、子どもたちが興味関心をもって知識・技能を習得するための工夫が見られた。

【帝国書院】

　デジタルコンテンツとキャラクターの会話形式を使い、14 ページに渡って丁寧に紹介し、子どもが興味関心をもって知識・技能を習得するための工夫が見られた。

・着眼点２－（１）ふるさと教育の推進の観点から比較

【東京書籍】

　模式図や動画等を活用して岐阜県の地形の特徴が分かりやすく掲載されている。岐阜県に関わっては、デジタルコンテンツにおいて海津市の空から見た映像動画や模式図で低い土地の様子が紹介されている。地図上のイラストが 11 点紹介されている。

【帝国書院】

　地図上のイラストやデジタルコンテンツにおいて、岐阜県の特産品や土地利用の様子が詳しく示されている。岐阜県の地図上のイラストが 12 点紹介されている。また、海津市を含む低い土地の様子が模式図で分かりやすく示されている。さらに、歴史学習において岐阜県に関わる資料やデジタルコンテンツが充実しており、江戸時代の結びつきとして、中山道の経路も紹介されている。

・着眼点２－（３）について、可茂地区に多く在籍する外国籍児童や、学習に困り感をもつ子供への配慮という観点で比較

【東京書籍】

　世界地図の主要国を、日本語と英語で表記している。

【帝国書院】

　QR コンテンツにおいて、ポルトガル語でも表記されている。さらに、詳細地図にくわえて「広く見渡す地図」が 10 ページ作成されている。このページは、情報の精選や特産物などのイラストも豊富で、誰にでもわかりやすい地図になっている。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【帝国書院】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫

・【日本文教出版】は５・６年生で一冊になっていて、【東京書籍】は５・６年生が分冊になっている。内容的にはつながっているところがあるため、分冊になっていることがどう影響するかを検討したのであれば知りたい。

⇒重さの軽重はあるが、上・下の分冊になっていることは、いろいろな使い方ができるため、どちらがよいかという比較検討はしていない。ただ上・下に分かれている方が、どの分野の学習をしているかがはっきりする。つながりという面では自分で判断して学べるため、影響はないという話題になった。

・着眼点１の「知識・技能」の技能について、社会科における技能をどのように捉えたのか教えてほしい。
⇒資料活用において、資料の読み取りを考えた。資料の量については【日本文教出版】が詳しくて豊富であった。しかし、現場で指導する教員は社会科専門とは限らず、教員にとっても子どもにとっても扱いやすく精選されているものとして【東京書籍】を考えた。

・着眼点３の「問題解決的な学習に取り組むため」について、最終的に絞られた２者の違いについて知りたい。
⇒【日本文教出版】は、問題を発見する力を身に付けよう・問題解決・問題追及といった３段階で示されているが、【東京書籍】は、つかむ・調べる・まとめる・広げるという構成になっており、子ども達が自分たちで調べていけるような導きが見られた。

・保護者の立場として、日々の生活において、いろいろな人がいる中で、いろいろな問題があると思うが、自分たちで解決していける能力を学校の授業を通して身につけてほしい。

・扱う人物や扱う文化遺産についての重点のかけ方が、２者についてあるかどうか。
⇒先ほど説明した第２次世界大戦についての場面で、【日本文教出版】は深く詳しい資料があり興味関心をひくように構成されている。可茂地区の子どもたちは難しいものから手を引く傾向もある。一方で【東京書籍】は、まずは分かりやすい資料から入り、授業を通して興味関心を高めていくという構成になっている。

〇小学校「社会」教科用図書採択原案について、可決
〇小学校「地図」教科用図書採択原案について、可決

■「算数」の調査研究報告
・各者の特徴について
【東京書籍】
　２年生以上に「今日の深い学び」のページがあり、自他の考えを比較・検討しさらに追究していく流れが設定されている。
【大日本図書】
　巻頭に数学的な見方・考え方（「ひらめきアイテム」）を位置付け、単元ごとに働かせた見方・考え方の足跡を残していく流れとなっており、児童自身が思考し続けられる工夫がなされている。
【学校図書】
　数学的な見方・考え方を、「考え方モンスター」として教科書のいたるところに位置づけている。また、単元末には、身につけた見方・考え方を振り返るページがあり、数学的な見方・考え方を大切にしていると感じる。
【教育出版】
　「つながるミカタ」という吹き出しがあり、必要な見方・考え方をはっきりさせ、次の問題解決に活用する流れをつくっている。
【啓林館】
　単元の始めに既習内容の２次元コードや巻末に単元の準備の問題があり、単元末や巻末などで多く

の問題に取り組むことができる。
【日本文教出版】
　巻末の算数マイトライが魅力的である。３つのコースが設定されており、算数が苦手な子への基本問題だけでなく、発展的な学習を扱うコースや、複数の単元を横断した探究的な問題を扱うコースがあり、児童が選択することで、学習の個別化が図れるようになっている。

・着眼点１－（１）について
　５年生「割合」の単元では、【東京書籍】と【大日本図書】の２者のみ、問題文から基準量と比較量は何であるかをまず問うていた。その際、【東京書籍】はイラストを用いることで視覚的に理解しやすくしていた。【大日本図書】は、教科書を２ページ用いることで、まず問題を数直線図に整理して、その数直線図を用いて比較量を考えさせており、スモールステップで進めている。

・着眼点１－（３）について
　６年生「円の面積」の葉っぱの形をした複合図形の求積をする学習では、【東京書籍】は登場人物による本時につながる既習内容のつぶやきをのせ、解決の見通しをもたせていた。【大日本図書】は導入で作図する活動を位置付けることで、図形を構成する要素に児童自身が気付けるような手立てがあった。どの者も多様な考えを扱っているが、中でも【東京書籍】と【大日本図書】は複数の考えの共通点に着目させる問いを設定することで深い学びへ導き、統合的に考察する力を育むことができる構成であると考えた。

　絞り込んだ２者について説明。

・着眼点１－（１）について、２年生の２けたのたし算やひき算の学習で比較
【大日本図書】
　他者に比べて、筆算の仕方とブロックや〇などの図の操作を並べて表記している問題が多い。初めて筆算を扱う場面では、形式である筆算と思考である操作をつなぐことで、思考によって知識・技能が身に付き、ブロック等操作の思考の仕方を体験することで、主体的に学習に取り組む態度を育成できると考えた。
【東京書籍】
　筆算のみの表記となっている。２次元コードによる動画では、図と筆算をつなげているが、２次元コードを読み取るひと手間を考えると教科書にも書いていてほしいと感じた。

・着眼点１－（１）について、【大日本図書】では、導入時に扱われている日常場面のイラストや写真の中に、単元で働かせたい数学的な見方の手立てとなる意図ある工夫が、１ページに渡ってあるのが魅力である。４年生面積の単元では、単元の途中に広さの感覚をつかませるために身の回りの物の面積を調べる活動があったり単元末のたしかめでは、身の回りの面積を問うなどの量感を養う問題が多数あったりする。このように生きて働く知識・理解の面で【大日本図書】の方が【東京書籍】に比べ優れていると考えた。

・着眼点２－（２）について、各者ともプログラミング的思考を高めるページがあるが、【大日本図書】は全学年に位置付けられており、その量が他者に比べて多い。また、単元で学習したことをもとに、それに関わるプログラミングの題材を位置付けている。【東京書籍】は、４年生以上に位置付けられ、

巻末に特設されている。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【大日本図書】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・【大日本図書】については、子どもの思考を促すよう丁寧な配置・配分になっているとのことだが、【東京書籍】と【大日本図書】のページ数は異なるか。それほど変わらないのであればどこで相殺されているのか。
⇒【東京書籍】と【大日本図書】において、【大日本図書】が目立って少ないということはない。全体のページ数は、６年生で言えば【大日本図書】の方が２０ページ多くなっている。２年生の筆算の例を先ほど説明したが、繰り下がりの筆算において、【大日本図書】は筆算形式とブロック操作を重視している。可茂地区の実態からいえば、筆算と操作をいかにつなげていくかを重視したいと考えた。

・他の４者について一言ずつでよいので、もう少し詳しく説明がほしい。
⇒【学校図書】【教育出版】は、数学的な見方・考え方を大切にした構成になっている。ただ、深める時間が他社と比べるとあっさり扱っている傾向がある。【啓林館】【日本文教出版】は、問題数は多く巻末に３段階の問題がある。また通常は単元の最後に問題があるが、単元の途中にも問題があるのが特徴的である。ただ、もう少し数学的な見方・考え方を大切にした構成だとよい。

・全国学力・学習状況調査では、日常生活を考えたり、日常生活の問題を仲間と協働して考えたりするような問題があり、これからの子ども達に必要な力だと捉えているが、そういった力をつける教科書として【大日本図書】が良いと言われた根拠を教えてほしい。
⇒学んだことを生活に生かすということでは、【大日本図書】と【東京書籍】が充実している。４年生で【東京書籍】はグラフや表の学習をした後に、学校生活でけがを減らす呼びかけのプレゼンを作る場面がある。熱中症や給食をテーマにしている場面もあり、「おもしろ問題」で１８ページを使っている。【大日本図書】では「なるほど算数教室」において、２６ページを使っている。他の４者にもこのようなページはあるものの、ページ数ではやや少ない。

〇小学校「算数」教科用図書採択原案について、可決

■「理科」の調査研究報告
・すべての教科書で、「理科の見方・考え方」を働かせた問題解決を意識できるよう構成されている。その点と、生活とのつながりを中心に、各者の概略を６年生「燃焼の仕組み」のページを紹介しながら説明。
【東京書籍】
「パンダの発言」で見方・考え方のポイントを示し、問題をつかもうでは「結果とその原因」、考察では「比較する」という考え方が示されている。「児童」の台詞で思考のヒントを示している。「理科の世界　探検部」では他の事物・事象につなげ、理科の学びの有用性につないでいる。ただ、内容に少し難しさを感じた。
【大日本図書】
最初の単元の流れの中で「問題を見つけるコツ」「予想するコツ」のように見方・考え方のポイントを示している。「深めよう」では学習を更に深め、「りかのたまてばこ」では、学習とつながる事物・事

象をいくつも紹介して生活につなげている。
【学校図書】
　単元で身に付けたい「見方・考え方」を「理科モンスター」というキャラクターで示し、楽しく意識付ける工夫がある。「問題を見つけよう」では、事象を見た気付きや疑問を出し合い、問題につなげることを大切にしている。
【教育出版】
　注目したい点を先生の台詞で示し、気付きや考えを児童の台詞で例示している。特に見方・考え方に関する部分はマーカーを引き、「〇〇のカギ」と記し、意識付けている。「資料」を多く載せ、学びを広げる工夫がある。内容に少し難しさを感じた。
【啓林館】
　予想や考察の場面では、見方・考え方に関することを台詞で示し、マーカーを引き、児童への意識付けが非常にしやすくなっている「くらしとリンク」などで生活や社会との関連を多く取り上げ、理科の学びを深め、有用性を実感させることに非常に有効である。

　絞り込んだ２者について説明。

・着眼点１－（１）について、４年生「地面を流れる水のゆくえ」の観察実験の実施について比較
　両者とも実験の手順や考察の視点を丁寧に示している。実験方法について、【東京書籍】は「校庭の土」と「砂場の砂」を比較して実験しているのに対して、【啓林館】では、それに加えて「じゃり」についても比較して実験をしている。土の粒の大きさと水の染み込みやすさの関係についての考察を、より確かなものにできるような工夫がされている。

・着眼点１－（１）について、６年生「動物のからだのはたらき」の実験方法の説明について比較
　ポリエチレンのふくろに気体を入れ、気体検知管を差し込み、酸素と二酸化炭素の体積の割合を調べる実験であるが、【東京書籍】はふくろの口の閉じ方について明記はなく、あなの開け方は「ふくろに、ハサミで穴をあけて、気体検知管を差し込む」とある。一方【啓林館】は、ふくろの口について「モールで閉じる」とある。穴の開け方は、「セロハンテープを１枚はって、切り口をつくる。もう１枚を重ねてはり、開け閉めする。」とる。手間は多少かかるが、より確実な方法の説明といえる。

・安全への配慮について比較
　両者とも「注意」「きけん」マークと赤字で説明がついている。【東京書籍】は集気瓶の場所を指定せず、「やけどをしないように気をつける」とあり、【啓林館】は「熱くなったビンのふたを直接触らない」と具体的な図を付け、誰にでも分かるように説明がついている。

・実験器具の取扱いについて比較
　両者の違いは、【東京書籍】は器具の使い方が巻末にまとめてあるのに対し、【啓林館】では、使う場所に説明があり、扱いやすくなっている。

・着眼点１－（２）日常生活や社会との関連について
　両者とも大切にし、いろいろな事物・事象を載せている。３年生「風の力のはたらき」において、【東京書籍】は、「理科の世界　たんけん部」として凧揚げと風力発電を取り上げている。【啓林館】は、まず身近な例としてタンポポの綿毛、強い風で壊れた傘を紹介し、さらにヨット、風鈴、凧揚げ、風力発

電を紹介し、つながりを大切にしている。

・着眼点１－（３）考察の場面について
　３年生「風の力のはたらき」風の強さを変えて車が動いた距離を比べる実験の結果処理について、【東京書籍】は３回繰り返し、最も遠くまで動いた地点の距離だけを測り、数字で記録をしている。それに対して【啓林館】は３回の結果全てを測り、記録するとともにクラス全体の結果を１枚のグラフにシールを貼って表している。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【啓林館】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・問題解決をするという、問題発見から実験計画をし、考察をしていくという過程では、両者の違いはあったのか。
⇒両者とも、問題を見い出すことに力を入れている。何かしら体験をした上で問題を見い出し、そこから根拠のある予想を立てられるように、児童や教師のキャラクターが視点を示すことで、予想がたてられるようにしてある。また解決方法の発想として、変える条件や変えない条件は何かということに着目させる工夫が両者ともにあった。多面的な考え方については、【東京書籍】では「見た目を比べると」とか、「塩酸を注いだときの様子」というように視点を示しながら考えることを示している。【啓林館】は、「いろいろな結果を合わせて考えてみるとどうだろう」というように示してあった。問題解決の過程という点においては、両者ともに優れていた。

・どの者も、見方・考え方を明示して、子ども達に意識させていきたいという方針で編集されていることがよくわかった。その上で、実験の手順や安全への配慮、実験器具の取扱いということで、理科は実験や観察が重要であるため、そこに焦点を当てて比較されていたことが良かった。実験観察や考察についても、理科の専門外の先生が授業を行うことを想定したときに、本日の視点は大切だと感じた。

・【啓林館】の教科書で、ペットボトルを使った実験器具があったが、専門的になりすぎて特殊な実験器具が多くて扱いにくいということはないか。
⇒ペットボトルの実験器具も調査の段階で作って実験をしてみたが、簡単に作ることができた。決して特別なものということはない。身近にある材料を使いながら実験を行うということが基本となっている。

〇小学校「理科」教科用図書採択原案について、可決

■「生活」の調査研究報告
・各者の発行者の特徴やよさについて説明
【東京書籍】
　児童の思考の流れに沿った学習の過程が丁寧に扱われている。黒板の板書や児童の学習ノートを掲載し、授業の場面が具体的に想起できるようになっている。
【大日本図書】
　学習の導入や活動後の児童同士の交流場面で、電子黒板を活用し視覚を使って分かりやすくする配

慮がなされている。単元初めには、児童の活動場面の写真を示し、意欲を高める工夫をしている。
【学校図書】
「たくさん技を学ぼう 生活科 学び方図鑑」を最後に位置づけ、話し方、聞き方、インタビューの方法などを丁寧に示している。また、ふるさと教育の視点から地域性を活かすことに配慮されている。
【教育出版】
中学年以降の教科への発展を視野に入れてある。また、児童自身の気付きや振り返りを重視し、自信や意欲を引き出す工夫をしている。
【光村図書】
学習過程を明確にしている。活動後の振り返る活動を重視し、単元ごとに振り返ると共に年間を通して自分の成長に気付くようにしている。
【啓林館】
単元の流れをわくわく、いきいき、ぐんぐんという３つの段階で示し、各時間の内容を明確にしている。活動で見つけたことを、表現し伝える場を取り上げ、学習を深めている。

・着眼点２－（１）ふるさと教育について
身近な地域や人とのかかわりを６者とも大切にしている。どの発行者においても、地域を舞台にした活動を仕組み、児童と関わる人々やもの・ことに目を向けさせる流れとなっている。

・着眼点２－（２）及び２－（３）について
どの発行者も、学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもたちの学びを支える内容を、学習の流れの工夫や学び方のヒントを掲載して分かりやすくつくられていた。その中でも、【東京書籍】、【光村図書】の２者は、より配慮がみられた。この２者は、実際の授業を進める場面を想定し、教室での教師の投げかけや板書を示していた。多様な学び方になるように考え方やまとめ方の例がイラストを用いて、豊富に掲載されており、児童が学びの姿をイメージしやすいようにしている。また、インタビューの仕方や、電話のかけ方など、技能面についても具体的に記載されている。教員経験の少ない若い先生方が多い可茂地区の現状から考えると、このような配慮があることは使いやすい教科書であるといえる。また、２者ともに、イラストや写真を使って、車いすを利用している子どもや高齢者を示したり、外国人の児童が登場したりしている。これもこの地区の実態に即したものであると考えた。

絞り込んだ２者について説明。

【東京書籍】
友達とのメッセージ交換や、お世話になった人へのインタビュー活動を通して、自分の成長に気付きやすい構成になっている。また、おもちゃ製作の過程で児童がどのように思考しながら工夫したかが分かるようにイラストを載せている。友達同士の対話や思いを吹き出しに表すことで、児童にも学びやすい教科書になっている。
【光村図書】
一年間の生活を写真・絵・カードで振り返り、自分の成長に気付くことができる構成になっている。また、おもちゃ製作の過程で、材料の特徴を生かしたおもちゃが出来るように思考する場が設定されている。児童の対話が具体的で分かりやすく示されているため、児童がイメージしやすい教科書になっている。

・２者ともに、資質・能力三つの柱をバランスよく育成する、意図的な単元構成になっているが、特に【東京書籍】では、グループの話し合いの場面を取り上げ、仲間同士で対話をしながら学びを深めていく過程が詳しく示されていた。

・着眼点１－（２）スタートカリキュラムについて
　２者ともに重視し、２０ページ以上掲載している。児童の安心・安全を重視し、通学の際の注意を呼びかける内容をここに掲載している。２者とも学校生活をスタートさせる保護者の理解・協力を得るため、保護者に向けた説明を丁寧に載せている。

・着眼点１－（３）主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について
　グループ交流、話し合い、伝え合う活動の工夫を視点として調査した。「町探検」で見つけたことをまとめ発表する過程で、２者とも話し合いの視点を「誰に、何を、どうやって」と明確にしていた。グループ学習での話し合いがより具体的に深められるように工夫されていた。
　特に【東京書籍】は、「町探検」の単元と独立させる形で、調べたこと、分かったことを「伝える」単元を設定している。発表会や表現活動の場を設定し、計画・準備・実施・振り返るという過程を経験させる中で、仲間との関わりができたり、より分かりやすくなる工夫を考えたりする学びの深まりがみられた。また、伝え方のイメージがつかめるように、新聞やポスター、パンフレットの作品例を分かりやすく掲載していた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【東京書籍】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・【東京書籍】で町探検を取り上げて、「グループでの活動をいかに伝えるか」について丁寧に扱っているということだったが、【光村図書】においてはグループ活動の扱いはどうか。
⇒２者ともにそれぞれ工夫された扱いがされている。特に【東京書籍】において、調べる過程、まとめる過程、発表する過程においてとりわけ工夫して丁寧に扱っているということである。

・低学年の子ども達にとっては、一番は笑顔で生活できること、学ぶ楽しさだと思うが、そういう点でどのような違いがあるか。
⇒各者ともイメージしやすい工夫がされている。子供たちのイラストの吹き出しにおいては、各者とも工夫されているが、【東京書籍】における吹き出しの言葉は、仲間とのかかわりという点でイメージが持ちやすいものになっている。

・生活科では、教科書はきっかけであって、実際の活動が大切ではないかと思う。【東京書籍】の教科書を見ると、大きく写真が取り上げられていたりして、イメージが湧いてくる感じを受けた。これをきっかけにして、活動にスムーズに入ることができる。

・伝承遊び、町探検など、紹介されている活動の内容について教えてほしい。【東京書籍】における活動の特徴はあるか。
⇒【東京書籍】では、定点観察というか、同じ場所で年間を通して見ていくという動きが特に目立った。同じ町でも、四季によって見える景色が異なる、売っているものが異なるなど、活動のイメージが持ちやすくなっている。

〇小学校「生活」教科用図書採択原案について、可決

■「音楽」の調査研究報告

・着眼点１－（１）について、

【教育出版】

１度、４度、５度の和音に合う旋律をつくる学習を「音のスケッチ」というページで位置付けている。知識・技能に類するリズムをつくる活動からはじまり、つくった２小節の旋律を二人でつなげることで、４小節、さらには４人で８小節の旋律へと発展する活動を例として挙げている。また４小節目では、続く感じ、８小節目では終わる感じになるよう、キャラクターがヒントを示し、思考力や表現力の育成を図る構成になっている。児童一人一人の思いや意図を大切にしながら、仲間と協働してひとつの作品をつくる展開で、音楽づくりの楽しさを味わうための配慮がなされていた。

【教育芸術社】

１度、４度、５度の７の和音に合う旋律をつくる学習を「音楽づくり」のページで示している。リズムについては始めから示されており、和音に含まれる音を選ぶことと音の上りや下がりを考えた音のつなげ方を考える学習活動を示している。実際につくった旋律は、ＱＲコードを読み取り、自身が音を入力すれば、旋律となって再生されるため、すぐに聞くこともできるようになっている。仲間と互いに再生した音を無理なく正しく聞き合うことで、全体のまとまりを意識した旋律、変化のある旋律をつくりたいという児童の思いや意図を共有することもできる構成になっており、配慮が感じられた。

・着眼点１－（３）について、１年生の共通教材「ひらいた　ひらいた」で説明。

【教育出版】

方位磁針マーク「学びナビ」で、児童が見通しをもって学習を進めることができるよう、学びの手順が示されていた。ここでは、「お花の様子を歌や動きであらわそう」と児童が行うことを記述している。その後、花の様子が変わることによって、歌い方や動き方の変化を考える活動を示していた。一人一人の児童が、歌詞に合った表現の仕方を工夫し、仲間と見合いながら楽しく活動する構成であった。

【教育芸術社】

「考える」というマークで「はすの花はどのような様子か、はすの花のように開いたりつぼんだりして、遊びましょう」と仲間と一緒に遊ぶ活動を記述している。その後「うたう」のマークで、「はすの花の様子を思い浮かべながら、友だちと声や体の動きを合わせて歌いましょう」と、協働的な学習活動ができる構成となっていた。

・着眼点２－（１）について、４年生の和楽器「箏」の教材で説明。

【教育出版】

共通教材「さくらさくら」の学習と関連させて、鑑賞曲「さくら変奏曲」を構成している。共通教材の学習で、桜のイメージを十分にふくらませ、箏の学習に興味関心をもてるような配慮がなされている。更に、発展的な学習として、実際に箏を演奏する活動につなげていた。

【教育芸術社】

６ページに渡り、「日本の音楽でつながろう」という題材で箏を取り扱っている。「鑑賞、演奏、音楽づくり」の３つの領域と活動がバランスよく組まれており、同じ題材の中で、実際に箏を演奏する活動までが組まれていた。

・着眼点３－（２）教科書本体の印刷や製本等について
　どちらもユニバーサルデザインの観点での配慮がなされていた。巻頭や巻末の掲載内容にやや違いはあるが、写真やイラスト、著名人によるメッセージ等で、児童の関心を引き寄せる構成となっていた。２年生「かえるのがっしょう」のページを例に、児童の目線や思考の流れに沿って比較。
【教育出版】
　音階が楽譜上の音符の中に書かれていた。指使い番号と音符、階名、歌詞が縦一列に重ねてあることから、階名唱や歌唱がしやすく、フレーズのまとまりも感じ取りやすい紙面構成になっていた。
【教育芸術社】
　カエルのイラストで音の高さを示している。ドの音は口をすぼめ、目も見開いたびっくりした表情、レの音は、目を細め、にっこりした表情など、音によってカエルの表情を変えることも、音の違いを感じることができる配慮がなされていた。また、カエル、指使い番号、階名、歌詞、鍵盤ハーモニカの図が、縦一列に重ねてあることから、児童が着目する範囲が限られるという紙面構成になっていた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【教育芸術社】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・３年生からリコーダーが導入されるが、その扱いについて、２者で違いはあるか。
⇒【教育出版】は一つ一つの音、指使いの図が示されていて、その横にＱＲコードがあり、それをかざすと音が鳴るような構成になっている。【教育芸術社】はリコーダーの音を２小節くらいの旋律を伴う楽譜の中で練習するという記載が多かった。また、導入としてそれぞれの名前の書き方が若干異なっている。例えば、マウスピース、吹き口とかあるのだが、【教育芸術社】はマウスピースと書かれているが、【教育出版】は吹き口と書かれていることが印象的だった。

・リコーダーの導入においても差があって、【教育芸術社】が良いのか、同じなのか教えてほしい。
⇒リコーダーは３年生からの学びであるため重要視したが、子ども達にとっては、細かく丁寧に説明がしてある【教育芸術社】の方がふさわしい。

・多文化共生という点で、可茂地区は外国籍児童が多い。日本の音楽について琴の説明はあったが、外国の曲についてはどのように扱われているか。
⇒【教育出版】は、すべての学年にショートタイムラーニングとして英語の歌を取り上げている。【教育芸術社】では、３年生から６年生までが英語の歌が取り上げられている。また、多文化共生ではないが、多様性という点では、手話を取り入れた楽曲が【教育出版】はすべての学年で同じ曲を掲載して扱っている。【教育芸術社】は２年生であいさつの手話が取り上げられている。

・【教育芸術社】の特徴のひとつに、中学校の混声合唱を見据えていろいろな合唱の響きを学習できるようになっているとのことだが、具体的にどうような工夫があるのか。
⇒【教育芸術社】は、荒城の月や箱根八里等で、合唱の体系が示されている。ここで男声のみの合唱や混声の合唱を味わうようになっている。【教育芸術社】の方が、詩と音楽とのかかわりを味わおうというところで、それぞれの合唱と声の種類について示されてるところが顕著である。

〇小学校「音楽」教科用図書採択原案について、可決

■「図画工作」の調査研究報告

・着眼点１－（１）について

２者ともに全題材を通して、３つの柱に対応した「学習のめあて」が明記されていた。違いはめあての項目の数である。【開隆堂】は、３つの観点を３項目で平易な言葉で、特に中心となるめあてを下線と赤色の文字で強調して示していた。【日本文教出版】は、各題材において表現と鑑賞を一体としてとらえ、３観点を５項目に細分化して示し、評価規準の観点を児童も教師も正しく理解できる。平易な言葉でわかりやすい開隆堂の表記に比べ、日本文教出版ではそれぞれの題材についてどんな力がつくとよいのか、また、どんな工夫をすればよいのかがより明確な表記となっていた。

・着眼点１－（２）について

２者ともに５つの分野で題材が構成され、取り上げられている題材の数、バランスともに大きな差はみられなかった。【開隆堂】は、他教科とのどの内容とつなげられるかをわかりやすく提案しており、カリキュラムマネジメントがしやすくなっていた。一方、【日本文教出版】は、児童の発達段階や経験を考慮し、系統的・発展的に題材を設定していた。３・４年の木を使った工作、立体を例に説明。

【開隆堂】

３・４年上においてくぎの打ち方とのこぎりの使い方を習得する工作の題材が設定され、その後３・４年下では板材を切って組み合わせてつくる工作題材へと発展していた。

【日本文教出版】

３・４年上においてくぎの打ち方、下においてのこぎりの使い方を習得する立体の題材が設定されていた。工作と立体との違いとして、「工作」ではつくりたいもののイメージがあり、それをもとに釘を打つ場所や長さ、材を切る長さを決めて作っていく。一方「立体」では、「釘をうつこと」、「のこぎりで切ること」に集中する中で、つくりたいものを考え、作り上げていくという違いがある。玄翁や鋸を使うことは３・４年で初めて習得するため、繰り返し道具に慣れていくことを意図した日本文教出版の題材設定は児童の発達段階に丁寧に即して設定されたものであると考えた。

・着眼点１－（３）について

２者ともに対話を通して、協力して考えたり作ったりする題材がとりあげられている。【開隆堂】の５・６年下の「ドリームカンパニー」の題材では、商品開発から製品のモデル作り、発表用のプレゼンづくりと、仲間と協働してつくるダイナミックな造形活動が設定されていた。

・着眼点２－（１）について

２者ともに岐阜県の伝統工芸につながる題材が設定してあり、岐阜県にゆかりのある作家の作品も紹介されていた。陶芸に関して、陶土をつかった題材を例に説明。３・４年上の教科書では、【日本文教出版】では「かきべら」と「切り糸」を用いた題材があるが、【開隆堂】では、「かきべら」のみが用いられていた。５・６年下の教科書では、【日本文教出版】では２つの題材があり、たたらづくり、ひもづくり、手びねりで形をつくり、釉薬をつけて焼成して作品をつくっている。【開隆堂】も２つの題材があり、たたらづくり、手びねりで成形しているが、ひも作りの扱いはなく、焼成は紹介するのみとなっている。その他、【日本文教出版】では美濃和紙の魅力を伝えるコンテンツがあり、ふるさと岐阜県への誇りと愛着を育むための題材がより多くとりいれられていた。

・着眼点２－（２）について

２者とも二次元コードをタブレットで読み取り、参考作品の鑑賞や用具の使い方、製作の手順を自

分で調べて視聴することができる。中でも【開隆堂】は、ワークシートもダウンロードでき、活用できる工夫が十分になされていた。

・着眼点２－（３）について
　２者ともにＳＤＧｓの視点と題材とを関連づけて示しており、ほとんど差がなかった。【開隆堂】では「つながる造形」で学校生活や地域、社会と図画工作とのつながりを示し、【日本文教出版】では、裏表紙に「つながる図工」を掲載し、様々な人とのつながりが示されていた。

・調査項目３について
　着眼点（１）、（２）については、２者とも適切な配慮がなされており、ほとんど差はなかった。
　着眼点（３）については、２者とも巻頭に年間の見通しをもつページがあり、いずれも児童にわかりやすく示されていた。図工の見方・考え方が広がるような題材を例に説明。【開隆堂】では巻末に「ひらめきショートチャレンジ」という資料で楽しんでできる小題材を取り上げ、活動を通して発想の仕方を示していた。【日本文教出版】では、「図工のみかた」という資料で、学年に応じて、低学年では五感をつかった身近なものの見方を紹介し、中高学年では、発想の仕方や発展的なものの見方を育むしかけがなされていた。また、造形的な「ものの見方・考え方」「豊かな形や色との出会い」が一層大切にされていた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【日本文教出版】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・子ども達の作品を作りたいという憧れや意欲を喚起することが大事である。２者に掲載されている資料や参考となる絵に違いがあって、どちらかが良いという判断があればその例を示してほしい。
⇒【開隆堂】【日本文教出版】どちらも、子ども達が作ってみたい、やってみたいと思わせる作品が掲載されている。特徴的であったのは、５・６年生の上にあるアニメーション題材である。【開隆堂】は子供が紙粘土を使ってキャラクターを作り、それを基にしてアニメーションを作る題材となっている。一方、【日本文教出版】は、形に命を吹き込むということで、身近なものを使ってアニメーションを作っていくという扱いになっており、より動きについて着目した題材設定に面白さを感じる。【開隆堂】も子ども達の意欲は喚起するが、何個がキャラクターを作らないとアニメーションとして完成しないため時間がかかる。どちらもやりたいと思うが、子ども達に付けたい力、いろいろな題材への出会いという点で、【日本文教出版】がよい。

・【開隆堂】と【日本文教出版】の学習のめあてに大きな違いがあるという説明であったが、可茂地区の子ども達や先生達にとって、平易な方が良いのか明確に示す方が良いのか、どちらがよいか。この点について補足説明があれば教えてほしい。
⇒可茂管内は若い先生たちが増えていることと、図画工作が専門ではない先生が多くいることから、平易な言葉であると、評価規準が十分捉えきれずに作品作りが進んでしまい評価が難しくなるのではいか。一方、【日本文教出版】は何を大事にしなければいけないのかについて、風景の題材では形や色のバランスや奥行きを理解するとか、思いに合わせて色を選ぶとか、具体的に記載されている。【開隆堂】の風景の題材では、お気に入りの場所からとか、気持ちが表れるように描き方を工夫するなど、どのようにというところが十分に示されていないため、若い先生や子ども達が迷う可能性がある。

・鑑賞の分野については、教科書の役割が非常に大きい。【日本文教出版】の鑑賞の分野での構成の特徴があれば教えてほしい。
⇒【日本文教出版】は題材の中でも鑑賞を大切にしている。巻末には「アートカード」というものを全学年で位置付けており、子ども達がいろいろな作家の作品に触れる機会を設けている。短時間でできる題材であり、優れた作品、美しい作品に出会わせていきたいと考えたときに、この「アートカード」は有効である。

〇小学校「図画工作」教科用図書採択原案について、可決

■「家庭」の調査研究報告
・着眼点１－（２）について、目次を例に説明。
【東京書籍】
見開き１ページに、各教科との関連が焦点を絞って示されていると共に、５年生で学ぶこと、６年生で学ぶことが横１列に示され明確であった。また、６年生で「夏をすずしくさわやかに」と「冬を明るく暖かく」を学び、年間を通じて、夏と冬の生活を比較しながら学ぶことができる学習の流れになっていた。
【開隆堂】
見開き 1 ページに全教科との関連が大まかに示され、次のページに目次が示されていた。学年の表示はなく、示された順で学習を進めると、５年生で「暖かい住まい方で快適に」を扱い、６年生で「すずしい住まい方で快適に」を扱う順となっていた。年をまたぐことで、夏と冬の生活の比較が難しくなると考えた。

・着眼点２－（３）について、「いためる調理」を例に説明。
【東京書籍】
作り方と共に野菜を切った後の、実物大の写真が掲載されていた。ピーマンの幅５ｍｍとはどの程度の物か、計画の段階からイメージでき、実際に調理しながらも、教科書の写真を頼りに学習を行うことができる。
【開隆堂】
作り方と同じページには、イラストで野菜の切り方が示され、巻末に実物大の写真が掲載されていた。

・着眼点３－（２）について、「ページ全体の色の使い方」について比較。
２者ともに、衣食住を色で分けている点は共通し、食に関するテーマカラーはオレンジであった。
【東京書籍】
ページ全体は白を基調としているため、「伝統マーク」や「安全マーク」に注目しやすくなっていた。
【開隆堂】
ベースの段階でテーマカラーが使われており、色の範囲が広いため、「伝統マーク」や「安全マーク」等、他のマークが目に入りにくいように感じた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【東京書籍】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・家庭科は高学年のみであるため、専門でない先生や担任でない先生が受け持つことが多くある。指導がしやすいという点からの説明があったが、巻末の資料に違いはあるか。
⇒巻末の資料の違いについて、野菜を切る場面を右利き用と左利き用で記載されていることは、【東京書籍】と【開隆堂】に共通している。ただ、【東京書籍】は手の部分に矢印があり、このようにするとよいですとポイントが示されている。一方【開隆堂】は２つの写真の間にポイントが書かれているということで、東京書籍の方がより細かく示してあり指導がしやすい。

・家庭科は家でやってみるところまでの力をつけていきたいが、家でやってみたいと思う工夫、実践につなげる工夫があれば教えてほしい。
⇒【東京書籍】は、「夏休みわくわくチャレンジ」というページがある。長い休みを使ってやってみるとよいことが書かれており、教員も投げかけやすい。岐阜県では食育マイスターの取組があるが、そういうものとつなげながら指導できるものである。【開隆堂】でも「レッツトライ、生活の課題と実践」というページを扱っているが、大きなまとまりとしての扱いではない。

・安全面の指導について、２者に大きな違いはあるか。
⇒安全指導については、どちらもしっかりと扱っている。ただし、教科書についているマークの見やすさからすると、より目立った方が指導はしやすい。

〇小学校「家庭」教科用図書採択原案について、可決

■「保健」の調査研究報告
・各者の特徴について
【東京書籍】
　毎時間、「ステップ１～ステップ４」の学習活動を設定し、それぞれのステップに応じて思考力・判断力・表現力を育成することができるようになっていた。ステップ３では学習したことをもとにし、自分の考えを仲間と伝え合う活動が設定されており、６者の中で自分事として考えさせる内容が充実していた。
【大日本図書】
　楽しく興味を引く導入がされていた。「けがの防止」では、危険な場面が位置付けられたイラストを配置し、「私たちはどこかな」と示された人物を探すことで、自然にイラストの中の危険に目を向けることができるように工夫されていた。
【大修館】
　マークを用いて、他学年や他教科の学習内容との関連を分かりやすく示していた。また、「体育の窓」を中心に運動領域の学習内容を積極的に取り上げ、運動と健康との関連について具体的な考えがもてるようにしていた。
【文教社】
　毎時間、学習の最後に「もう一歩先の自分へ」を位置付けており、自分を振り返り生活に生かせるようになっていた。さらに、章末には、「わたしのスッキリ宣言」を位置付け、明確な目標をもち生活できるように工夫されていた。
【光文書院】
　各章に「広げよう　深めよう」のページが位置付けられていた。子供たちがよく知る人物をとりあ

げ、いろいろな人の考え方を知ったり、学びを深める生き方のヒントを得ることができたりするように工夫されていた。オリンピック選手やパラリンピックの選手のみならず、タレントや作家など、多種多様な人物を扱っている。
【学研】
　毎時間、学習過程が３つのステップになっている。ステップ２では協働的な学びを、ステップ３では、学習したことから自らの課題解決についてまとめる活動を取り入れていた。さらに、「ほけんのはこ」が位置付けられており、自分の考えを広げたり深めたりできる発展的な内容が取り上げられていた。

　絞り込んだ２者について説明。

・着眼点１－（１）について、「けがや事故の原因」を例に説明
【光文書院】
　「話し合おう」というステップで、けがや事故の起こる原因を人の行動と環境に分けて自分で考え、仲間と話し合うという活動にとどまっている。
【東京書籍】
　原因のみでなく、事故やけがを防ぐための対策についても考え話し合う構成になっている。さらに、話し合った後に「ほかの人の意見を聞いて、考えたことや分かったことを書きましょう。」という活動が位置付けられている。このことにより、自分の中で、考えを再構築することができ、より考えを広げたり深めたりする力をつけることにつながると考えた。

・着眼点２－（２）の項目について
【光文書院】
　毎時間、単元名の横にＱＲコードがあるものの、実際それが本文のどこに関わってくるのかがやや分かりにくく、 活用場面を探す作業に時間がかかる。
【東京書籍】
　本文中の活用部分にＱＲコードが位置付けられており、分かりやすい。さらに、ＱＲコードの下にタイトルがついていることでどのような内容かも分かりやすく直感的に活用できる。また、「病気の起こり方」において、タブレットを操作しながら自分で考え、それを仲間に伝えることで深めることができることは、他者にはないコンテンツであった。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【東京書籍】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・心の健康という点についてはどうか。
⇒全者においてきちんと記載がされている。体ほぐしの運動との関連もしっかりと位置づいている。
　体育の領域と保健の領域でどの教科書を使うにしても、一体的な指導をしていくものである。

・清流の国ぎふということで、水辺の事故についての比較はしたか。
⇒水辺の事故について、今回は詳しく調査はしていない。両者を比較すると、事故の防止の場面で資料として自然災害から身を守るということで、洪水や大雨についての記載はあるが、川辺の事故についての記載はなかった。水辺の事故については、運動領域の水泳において指導をするものである。

・【東京書籍】は、まとめの工夫において自己を振りかえるという記載がされているが、他者はどうか。自己を振り返るということをどのように扱っているか。
⇒【東京書籍】は、日頃の自分の生活を振り返って、事故にあわないようにどうしていくかをまとめるという構成になっている。もう１者もまとめの場面では、学んだことを生かそうということで自分の生活に返すということをしている。両者とも大きな差はない。

〇小学校「保健」教科用図書採択原案について、可決

■「英語」の調査研究報告

・各者の特徴について

【東京書籍】

各単元の初めに単元目標と資質・能力に関する３観点の目標が示されており、単元終末に向けて、スモールステップで育成する構成となっていた。４技能５領域の学習内容が、発達段階に応じて配列され、無理なく習得できるように工夫されていた。

【開隆堂】

学習のめあてが、見開きごとに示されており、単位時間の学習の流れがつかめる。世界や日本の文化についての題材や資料が豊富に扱われ、視野が広がるように工夫されていた。

【三省堂】

各 Unit が、見通し、表現に慣れ、活用する３段階で構成され、各単元の役割が明確になっていた。児童がプロセスを理解して学べる工夫があった。４技能育成のための学習活動が各ページの決まった位置にあり、1 時間の学習が見開きで見通せるため、使いやすい紙面構成である。

【教育出版】

各 Lesson の終末に「読むこと」、「書くこと」、「話すこと」の内容が包括された言語活動が位置付いていた。巻末には、カードやシール等が豊富にあり、楽しみながら学ぶように工夫されていた。

【光村図書】

単元内に、Small Talk や Let’s Try 等の話す活動が位置付いており、少しずつ既習表現を身に付けられる設計になっていた。小単元で「日本語と英語の比較」や、食物連鎖に関する題材があり、他の教科との横断的な学習が実現できる。

【啓林館】

２次元コードが豊富に記載されており、文字と音声のつながりが大切にされていた。学習者用デジタル教科書では、英文と動画や、文字とイラストや音声が一緒に提示でき、理解促進のためのコンテンツが豊富であった。

絞り込んだ２者について説明。

・着眼点１－（１）について、２者に共通する「あこがれの人を紹介する単元」について報告。

【開隆堂】

５年生の Lesson８で扱われており、単元では、段階的に４技能を身に付けるように工夫されていた。「話すこと」については、表現に慣れ親しむ活動や伝え合う活動が設定されており、表現を増やしながら単元の終末の発表に向かう構成である。また、単元末には、発表したことを書く活動があり、５年生から英文を書く力の育成を図っている。

【東京書籍】
　５年生の Unit８で同じ内容を扱っている。Unit８では、単元のはじめに、登場人物の質問に返答する形式で児童の思いや考えが尊重されている。終末では、発表者と聞き手が、やり取りする活動があり、「話すことの発表とやり取り」の両面の育成を図っている。「書くこと」については、年間を通じて、音と文字をリンクして書く活動が位置付いており、段階的に習得できるようになっていた。指導の重点が明確であり、４技能５領域の力をより段階的にバランスよく育成できる構成であった。

・着眼点１－（２）について
【東京書籍】
　５年生の巻頭に文部科学省外国語活動教材「Let’s try」の学習内容をまとめた頁を設け、５・６年生でも３・４年生で慣れ親しんだ表現を繰り返し扱う等、スムーズな接続が意図されていた。
【開隆堂】
　５年生の巻頭に３・４年の学習事項を文字とイラストで提示し、重要な表現は５・６年生でも繰り返し扱われていた。また、別冊の Word Book には、中学校で学ぶ重要語に星印が記載されており、スムーズな接続が図られていた。

・着眼点１－（３）について
【開隆堂】
　「聞くこと」と「読むこと」、手本を見ながら「書くこと」で確かめた後に、先生に自分のことを話す活動が設定され、４技能の定着を確かめるようになっていた。インタビューでは、メモをもとに先生と話す活動が設定されていた。一方、この活動を通して「主体的・対話的で深い学び」を実現する点では、指導者の裁量によるところが大きいと考えた。
【東京書籍】
　Check your step１において、自分のニュースを話す活動が位置付いていた。モデル発表の聞き取りの後、伝えたいことを整理して、仲間や学級全員に向けて話す活動が示されていた。STEP には、工夫したいことを考える場があり、児童が内容や方法、話し方について、思考・判断・表現する過程が位置付いている。さらに、伝えたいことを、形成・整理する活動が位置付いており、主体的・対話的で深い学びのできる学習活動が仕組める設計であると考えた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【東京書籍】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・中学校との接続という部分も調査している。近年中学校１年生の内容も難しくなっており、英語の力も二極化していると感じる。発展性・系統性は大切であるが、書くことに関する力はこれまで小学校で疎かにされてきたのではないかと感じる。書くことに関する学習の量について【東京書籍】と【開隆堂】で違いはあるか。
⇒どちらの教科書も書く活動については、大変丁寧に指導するように準備がされている。６年生の最後にある自分の夢について書く活動をみると、同じだけの量を書く活動が設定されている。２者の違いは、【東京書籍】は５年生で緩やかにアルファベットから順に丁寧に指導していくという意図があり、【開隆堂】は５年生から文を書いたり写したりしている。その点は異なるが、どちらも着実に力をつけるように仕組まれている。

・英語を学ぶときには、生の英語、ネイティブスピーカーの英語を聞きたい。ＩＣＴ関係でどちらが使いやすいか。
⇒学習者用デジタル教科書も調査をした。【東京書籍】も【開隆堂】も学習者用デジタル教科書の中に、二次元コード等もたくさん準備されている。聞きたい音声についてＱＲコードをかざせば、その部分の単語や文が出てくるように工夫されている。２者を比較すると【東京書籍】の方がコンテンツは多い。動画と英文、歌、文化についての紹介動画もたくさん収録されている。

・主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について、外国語の授業において、主体的・対話的な学びは思い浮かぶが、深い学びというときに、【東京書籍】の教科書をこのように活用するとよいということを教えてほしい。
⇒６年生の夏休み前の check your step１の活動は、友達とやり取りする活動や学級全員の前で発表する活動の両方が考えられる。練習の段階で友達とやりとりしながら自分が言ったことが相手にうまく伝わっているのか、ひょっとすると違う表現の方がより相手に伝わるのかを、子どもが試行錯誤することができる活動が仕組める。【東京書籍】の check your step１は１学期に学習した３つの単元の言語材料や学習したスキルをもとに、深く学ぶことができる小単元になっている。

〇小学校「英語」教科用図書採択原案について、可決

■「道徳」の調査研究報告
・着眼点（１）について
【東京書籍】
「情報モラル」「生命尊重」「いじめ」などの現代的な課題に対応した内容を、教材とコラムでユニットを組んで、多角的・多面的にとらえられるようにしていた。「情報モラル」については、学年の発達に合わせた内容になっていた。
【光村図書】
１年生で道徳の学び方を、はじめの５つの教材を使って示したり、各学年で話し合いの仕方について、丁寧なコラムを位置付けたりするなど、道徳の学びの土台をつくる工夫がなされていた。

・着眼点１－（２）について
どの教科書も、重点としている内容項目がある。【日本文教出版】は、４つの視点それぞれについて、４つの学年で３教材を掲載している。児童や地域の実態に合わせて、市町村や学校で重点を決めて指導しやすいと考えた。

・着眼点１－（３）について
【東京書籍】、【光村図書】、【日本文教出版】は、教材のはじめに主題や関わる発問、おわりに道徳的価値を問う発問や、他の学習や日常生活に広げる発問が分かりやすく位置付いており、児童も指導者も内容をとらえやすい構成になっていた。

・着眼点２－（１）について
【教育出版】、【日本文教出版】、【光文書院】は、岐阜県の素材として、杉原千畝さんを教材で扱っていた。

・着眼点２－（３）について
　【日本文教出版】のみ、別冊で「道徳ノート」がついている。

・調査項目３について
　どの着眼点についても、大きな差はなかった。ただ、着眼点（３）について、【東京書籍】の巻末に掲載されている「思考ツール」は、ＩＣＴの活用も含め、多様な学び方ができるよう工夫されていると考えた。

　絞り込んだ２者について、１年生の「二わのことり」の教材で説明。

【東京書籍】
　状況の説明が中心で、気持ちを考えさせるようになっている。表現がシンプルであるという良さがある一方で、行間を読み取るむずかしさがある。
【日本文教出版】
　気持ちを表す言葉を文字で表している。詳しくて分かりやすいという良さがあるが、教材によっては、読み取らせたい気持ちも文字になってしまっているということもある。

・それぞれの教科書のよさがある。調査の段階で、大変迷ったが、やはり、外国人児童、発達障害がある児童など、文章から気持ちを読み取ることが困難な児童への配慮が必要であると考えた。
・また、詳しくわかりやすいことは、経験の浅い先生方の指導の助けとなるとも考えた。

・比較検討した結果、可茂地区の児童には、【日本文教出版社】がより適していると考えた。

≪報告を受けて協議≫
・同じ読み物資料で比較検討したことは分かりやすい。「手品師」の扱いについて、２者が４ページ分、１者は６ページ分を使っており、その中で外国人が多いという可茂地区の実態からしてページ数が少ない方が良いと説明があったが、そもそも文字数が違うのか。文字数が違わないとすると、ページ数が多い方が、挿し絵が多用されてわかりやすいということにならないか。
⇒文字の大きさは若干【光村図書】が大きい。ただ、大きさは読むことに関してそれほど変わらない。挿し絵についても、それほど変わらないがページ数が多い方が大きくなっている。読むことについて日本語が理解できない子にとってはページ数の多さから意欲が低下するのではないか、内容がほぼ同じであれば、ページ数が少ない方が良いのではないかと判断した。

・見開き６ページより見開き４ページの方が読みやすいという説明があったが、【日本文教出版】の他の資料についても、基本的にすべてが見開きになっているということか。
⇒すべてが見開きになっているかについては調査していないが、全体的に【光村図書】のページ数が多いというところは調査した。

・他の３者の６年生のページ数の差はどれくらいあるのか。
⇒【光村図書】２１２頁、【日本文教出版】１９４頁、【東京書籍】１９５頁となっている。

・調査項目１（２）に関係して、内容項目のバランスが良いのは【日本文教出版】であると説明があっ

た。各学校で重点を定めて指導するためにも大事なことであるが、他者の内容項目のバランスについて再度説明してほしい。
⇒各者の特色が出ているところだが、【光村図書】では命の尊さで一つ重点を絞っている。【日本文教出版】【光文書院】【学研】は複数の項目を重点としている。【日本文教出版】は４つの学年で３教材、【光文書院】は３つの学年で３教材となっている。より重点とする項目のバランスがよいのが【日本文教出版】と考えた。

・ある視点について【東京書籍】【光村図書】【日本文教出版】の３者から１者へと絞ったが、その他の項目について、この３者で比較した場合の結果はどうか。
⇒そもそもどの教科書も大変優れている。その中で、特に優れているという点で話すと【光村図書】は話し合い活動等、学びの土台を作る活動をすることに力を入れている。目次の続きや、各教材の後のコラム等でも力強く紹介されている。【東京書籍】は学び方に関して非常に力を入れている。各学校では道徳の学び方を最初に指導することが多いが、具体的にこのような発言をするとよいという発言例などを吹き出しで示している。【日本文教出版】の特徴については、説明した通りである。

〇小学校「道徳」教科用図書採択原案について、可決

■「令和６年度使用中学校教科用図書可茂地区採択原案」を提示し、審議
全員一致で原案通り可決。

■特別支援学級における一般図書について、適正な採択への配慮のお願い

（５）連絡
・７月５日以降に各市町村（組合）教育委員会は採択協議会の採択原案を議決し、７月３１日までに完了することを確認
・情報公開について、情報公開の対象及び情報公開の窓口を確認
・本協議会に係る情報について、８月３１日までは非公開であるため、内容等について他言しないよう依頼

（６）可茂地区採択協議会会長　挨拶
・本協議会出席へのお礼
・協議会の閉会を宣告